

ヨハン・セバスティアン・バッハの自筆楽譜の全ての冒頭に“SDG”という不思議な文字が記されていることは、長年にわたって謎でありました。その謎を解き明かしたのはベートーヴェンでした。ベートーヴェンはそれが「ただ神にのみ栄光あれ」という意味のラテン語“Soli Deo Gloria”の略であることを見抜いたのです。つまりバッハは自分が作曲したすべての音楽は「ただ神にのみ栄光あれ」との祈りをもって神に献げられたものであることを明らかにしているわけです。このことは、私たちキリスト者の人生にとっても同じことが言えるのではないのでしょうか。私たちもまた、みずからの人生の全体が、いつも“Soli Deo Gloria”(ただ神にのみ栄光あれ)との祈りをもって貰われたものであることを願いつつ生きる神の僕なのです。

そこで、今朝のルカ伝 14 章 12 節以下の御言葉においてもまた、主イエス・キリストは私たちにこのように語っておられます。「(12)また、イエスは自分を招いた人と言われた、「午餐または晩餐の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持の隣り人などは呼ばぬがよい。恐らく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けることになるから。(13)むしろ、宴会を催す場合には、貧しい人、体の不自由な人、足の悪い人、目の見えない人などを招くがよい。(14)そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」。

これは、ひとつの物語としてはとても単純なことです。「午餐または晩餐の席」というのは祝宴の席のことです。大きな喜びを人々と共にするために設けられる祝宴のことです。主イエスはこう言われるのです、そのような喜びの祝宴の席に、あなたはどのような人々を招待するだろうか。たぶん「友人、兄弟、親族、金持の隣り人」などを招くに違いない。しかし、そういう人々ではなく、むしろあなたは「貧しい人、体の不自由な人、足の悪い人、目の見えない人」などを招きなさい。なぜなら、そのような貧しい人たちはあなたに返礼ができないからだ。だからこそ、あなたは神から大きな祝福と幸いを受けることになるであろう。なによりも 14 節において「正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」と、主イエスは言われるのです。

これはある意味で、私たちの日常の常識、生活感覚を超えたことではないでしょうか。そして、だからこそ私たちはいつも問われています。私たちは自分の常識や社会経験に従って生きるのか、それとも主イエス・キリストの御言葉に従って生きるのか。そこで、具体的なことを申しますなら、もし私たちが人生の常識的な経験則を破って主イエスの御言葉にのみ聴き従うなら、そこには様々な社会的な軋轢や問題が生じる

に違いありません。つまり、今朝のこの譬話においても、蔑ろにされた「友人、兄弟、親族、金持の隣り人」などはきっと怒るに違いないのです。「あなたは祝宴に、どうして私ではなく、あのような貧しい人、体の不自由な人、足の悪い人、目の見えない人などを招いたのか？」と逆に問い詰められるに違いないのです。

つまり、今朝のこの御言葉は、それ自体がかなり挑戦的かつ大胆な内容を含んでいます。非常識かつ反社会的な、驚くべき御言葉であると言ってもよいかもしれない。そこで私たちは、まなざしを改めて今朝の14節の最後の御言葉「正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」に注ぎたいのです。ここに「正しい人々の復活の際には」とございます。あなたはこの大切なことをあなたの人生の最大かつ最終的な目標にしているか？と主イエスは私たち一人びとりに問うておられるのです。つまり主イエスは「正しい人々の復活の際に」あなたもその一人でありうるような人生を、あなたはいま生きる神の僕となりえているか？と、私たち全ての者に問うておられるのです。

そこで、私たちのまなざしを改めてさらに、今朝の御言葉の中の大切な人々である「貧しい人、体の不自由な人、足の悪い人、目の見えない人など」に注ぎたいと思います。主イエスは、これらの人々はあなたの親切に対して「返礼ができないから、あなたは大きな祝福を神から受けることになるだろう」と言われました。この「返礼ができない」とは「無力である」という意味です。そして、実はこの「無力さ」にこそ私たち人間の本質があるのではないのでしょうか。つまり、私たちはこの世の中でどんなに大きな功績を残そうとも「正しい人々の復活の際には」それは無力なものにすぎないのです。言い換えるなら(これは驚くべき逆説ですが)私たちが世間的な常識において尊んでいる「友人、兄弟、親族、金持の隣り人など」は、主なる神のまなざしからご覧になるなら「(正しい人々の復活の際には)無力な人々」にすぎないのです。

そして、さらに私たちは、私たちのまなざしをさらに、キリストの福音そのものに注いで参りたいと思うのです。すると、そこに何が見えてくるのでしょうか？。それこそ、人生の最終目的地であるところの神の国の永遠の祝宴に、私たちは招かれるべき資格やふさわしさなど何ひとつない「無力な」僕にすぎないという事実ではないのでしょうか。使徒パウロが言うように「義人(天国に入るべくして入れる人)はいない、一人もない」のです。この世界にはいま約75億人から80億人の人間がいると言われていますが、そのうちのただの一人たりとも「天国に入るべくして入れる人はいない」のです。これは、大変なことではないのでしょうか。言い換えるなら、人間は誰ひとりとして人生の最終目的地に自力では行き着けないのです。「中断される人生」を生きるしかない存在(パスカルの言う中間的存在)なのです。

それならば、主イエス・キリストは、まさにそのような私たちの計り知れない罪を

一身に担って、あのゴルゴタの十字架への道を歩いて下さいました。私たちの人生を滅びによって中断させないために、御自身の人生を十字架において中断して下さいました。私たちを人生の最終目的地である神の国に迎え入れて下さるために、御自身は十字架において死なれ、墓に葬られる者となって下さいました。その全ては私たちの罪を贖って私たちを救うためであり、御自身の十字架の死によって私たちに永遠の生命を与えて下さるためです。つまり、主イエス・キリストは、救いについて全く無力であった私たちを救うために、みずから無力さの極みの中に、どん底にまで降りて来て下さったかたなのです。私たちを絶望へと陥れる罪の支配を、十字架において徹底的に担い取って下さったかたなのです。ルターはこのことを「キリストは十字架において死の死を死んで下さった」と語りました。まさに私たちの無力さと滅びの極みである死に、キリストは十字架の死を通して永遠に勝利して下さったかたなのです。

これを言い換えるならば、主イエス・キリストは、救いに対して徹底的に無力であり、神の国の祝宴に招かれる資格も相応しさもなかった私たちを救い、御国の祝宴に招き入れて下さるために、あのゴルゴタの丘の上で、呪いの十字架を一身に担い取り、死の死を死んで下さったかたなのです。そして、この十字架の主イエス・キリストの恵みの確かさを知るとき、私たちは今朝の御言葉の 14 節の最後の御言葉の意味を正しく理解することになるのです。「正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう」。そうです「正しい人(十字架の主を信じて救われた人々)」の中に私たちもいるのです。私たちこそ「正しい人々の復活の際に報いられる」その人々なのです。主イエス・キリストが、私たちのために十字架を担い取って下さったからです。主イエス・キリストが、全く無力でしかなかった私たちのために十字架で生命を献げて贖いを成し遂げて下さったからです。

まさにここに、十字架の主イエス・キリストの恵みにおいてこそ、もはや私たちの人生は「中断される人生」ではありえなくなるのです。それは天国に国籍を持つ者の歴史における信仰の旅路であり、主イエスが与えて下さる平安と支えの中を、主イエスと共に、主イエスの祝福の内を歩む、新しい生命の歩みとされているのです。そして今日は待降節第一主日、まさにそのような「十字架の主」として、御子イエス・キリストがベツレヘムの馬小屋に御降誕下さった、その計り知れない恵みを心に刻みつつ、心を高く上げて歩いて参りたいと思います。祈りましょう。